

編集後記

昨年に続き、今年も新型コロナの状況は変わっていません。オンラインでの授業や、対面とオンラインを併用したハイフレックス型の授業も慣れてきましたが、新型コロナに対する精神的な緊張感は変わりません。

また、多くの学会でも昨年度と状況は変わっていません。私が所属している地域活性学会でも山形大会、金沢大会など、現地での開催を断念しオンラインでの開催になりました。数年前から大会準備をしてこられた開催地の先生も大変だったと思います。いつまでこの状況が続くのでしょうか。

さて、この新型コロナの状況は研究にも大きな影響を与えています。特に、我々の法政大学地域研究センターは、その名の通り「地域」をキーワードに活動しています。

地域研究といっても様々な見方やアプローチがありますが、やはり地域に直接訪問し、観察しインタビューなどを行いながら調査をすることが望まれています。しかしながら、新型コロナの状況でなかなか地域に行けない、もしくはインタビュー先に訪問をお断りされるということもあると思います。

現に昨年度発行の13号、本年度の14号をみても、コロナ過での地域研究の難しさが現れた投稿論文も多くなってきているのが現状です。コロナ過で思うような調査・研究ができなかった、というものです。またそれに伴い、調査方法や分析の不十分さに関する査読者からの指摘も多くなっています。

我々編集委員会としても、このコロナ過での地域研究はいかにあるべきか、また、どのような観点に基づいて査読を行うのか、改めて考えていかなければいけないと思っています。来年度は人々の生活が通常に戻り、新型コロナ発生前のように自由に地域研究ができていることを願ってやみません。

編集委員 松本 敦則